

## いざない

## 特別企画展 10月15日(土)より開催!

今開催している「特別収蔵展」は9月末日で終了し、入れ替え期間を挟んで10月15日から、特別企画展「浜名湖 湖北五山 ぶらり文学散歩 ～五山と文学との交差点を歩く～」が開催されます。



古刹にはそれなりの文学があるものです。

よく詣でたり、名前はよく耳にしたりしているお寺でも、そこがどのような小説の舞台となっているかとか、境内にはどのような文学碑があるかなどということは、案外知らないものです。

今回の企画展は、奥浜名湖の国指定重要文化財を有しているお寺「浜名湖 湖北五山」が登場している文学や、各お寺にある文芸的な所蔵品を展示し、この地域の文学(文芸)に触れて、当地を身近に感じていただこうというものです。

初山宝林寺・龍潭寺・方広寺・大福寺・摩訶耶寺の5つのお寺について、一挙に公開します。それぞれのお寺の展示品の中には、今回初公開の所蔵品もあります。ご期待ください。

## 文芸館の四季

9月13日、文芸館に珍しいお客様が来館してくれました。附属

中学校の生徒さん4人です。「総合的な学習の時間」を利用して、浜松の文化について調べ学習をしているとのことでした。生徒さんから「浜松ならではの文化とは?」「浜松の文化を守っていくためにできることは?」など、様々な質問がありました。また、浜松ゆかりの文芸人についての説明にも真剣に耳を傾けていました。

このような若い世代の人たちが、浜松の文芸に興味を持ち、担い手となってくれたらさぞ力強いことだろうと、帰っていく4人の背中を頼もしく見送りました。

すがすがしい気持ちで彼らを見送った後、あたりに甘い香りが漂っているのに気がつきました。風上の方に歩くと、文芸館を出てすぐのフェンス沿いの木にクズがつるのをのぼして、今を盛りと紅紫色の花を咲かせ、目と香りで私を和ませてくれました。

秋の七草でもあり、茎の繊維からは葛布を作り、根からは葛粉をとり、干した根は葛根と呼ばれ、漢方の解熱剤にもされるそうです。

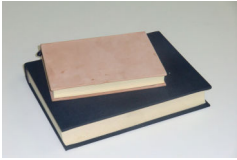
風に翻った葉裏が白く目立つところから「裏見」などと称されるようですが、花はもちろん茎にしても根にしても、これほど貢献しているのに、「クズ」だの「ウラム」だのと、何と語感の悪い響きを押つけられた不憫な草木なののでしょうか。

アスファルトの上に散ってまでも、マメ科の花らしい優しく包み込むような形を保ち、いじらしさを感じさせます。

花言葉は「活力」「芯の強さ」「治癒」だそうです。

(『花言葉事典』より)





## 浜松文学紀行 2

### 五社神社 中里介山「大菩薩峠」

十津川の戦いで爆弾のため失明した机龍之助は、伊勢で身を養い、東海道を下って浜松城下へ入ってきた。成子坂下の番所を入ると、左手の丘の上に虚無僧寺(普大寺)と法林寺が、前方に浜松城の天守閣がそびえている。

杖をついた不自由な身体で、龍之助は大旅籠<sup>はたご</sup>大米屋と花屋の前に行く。左手常寒山<sup>とこさむ</sup>の丘陵に諏訪神社と五社神社が並び建っている。

流麗華麗な五社明神の社殿<sup>ごくさいしき</sup>は、戦災で焼失する前は国宝に指定されていた。昭和 57 年に再建された現在の社殿も、極彩色重層入母屋造りの見事なものである。

「おい、虚無僧」

横柄な声で呼びかけた武士。振返ったところは五社明神の社前。

「おい、虚無僧、こっちへ入れ」

社前の広場に多くの武士が群っている。その中から、いま通りかかる机龍之助を呼び止めたものです。

(「大菩薩峠」第一巻)

これは、龍之助が武術の試合を終えたばかりの武士の一団に呼び止められて、「尺八を吹け」と強要されるくだりである。

この後話がこじれて斬り合いになるところを、お絹の仲裁で事無きを得る。

物語は、西来院近くのお絹の住まい、伝馬町の旅籠大米屋、天龍寺へと展開する。

大米屋では盗賊のがんりきが、二階のただ者でない浪人の正体を暴こうといたずら心を起こし、真夜中忍び込むが反対に手玉<sup>みょうごう</sup>に取られて引き下がる。天龍寺では、同じくがんりきが人混みの中で財布を掏ったのを、名号を授けていた高僧遊行上人にたちどころに見破られてしまう。これらは、全巻を通じても稀なユーモラスな場面である。

「東海道の巻」は、この後秋葉山道、掛川、中泉、府中、久能山、三保の松原、清水港へとつづく。

「大菩薩峠」は、大逆事件後の大正2年から 30 年にわたって書きつがれた世界一の長編小説で、日本の時代小説の源流をなす作品である。

物語は、机龍之助が大菩薩峠の頂上で、老巡礼を一刀のもとに斬り殺すところから始まる。数日後、奉納試合で負けてほしいと頼みに来た宇津本文之丞の内妻お浜を犯し、文之丞を一撃で倒し、お浜と共に江戸へ出奔する。やがて一子郁太郎が生まれるが、文之丞の弟兵馬から果し状が来たのがきっかけでお浜を斬殺、郁太郎を捨てて京に上る。

音無しの非情の剣をふるって次々と人を殺していく龍之助は、殺した相手の業を身に背負って無明の闇をさ迷い歩くのである。

この世の一切の約束事や人間的感情に囚われず、刹那の怒りや鬱屈した思いの爆発として殺人を繰り返す龍之助の悪の魅力と全編を貫く仏教的無常観が、時代を超えてこの作品を生き続けさせているのであろう。